
ジャンバッティスタ・マリーノの『ガレリア』と蒐集
—理想と現実のギャラリー—

本発表の目的は、バロック期を代表する詩人ジャンバッティスタ・マリーノと十七世紀イタリアのコレクションニズム並びに視覚イメージとの相関関係を、彼が同時代絵画の蒐集家であったことをふまえ明らかにすることである。

十七世紀イタリア絵画の蒐集と絵画受容研究に先鞭をつけたのはハスケルであるが、マリーノに関してはプッサンをイタリア人パトロンに紹介し、代表作『アドーネ』等で神話主題を提供したと言及するに留まり、後続研究においても、詩人の財産目録についてのフルコ（一九七九）以外は、本論題に関し十分な考察をなしたとは言えない。しかしマリーノとバロック期の画家や愛好家のあいだには、著作『ガレリア』に結実した「仮想コレクション」からもわかる関係性が認められる。その論証には、『ガレリア』の韻文の他に、画家やコレクターとの間で交わされた書簡等の関連資料、詩人の実際の蒐集活動、更にはナポリの自邸での美術館構想が材料となりうる。

初版の出た一六一九年秋以来、一六七五年までに十六版を重ねた『ガレリア』を構成する詩は、おのおの主題として絵画・彫刻作品をもち、実在の作品に関しては大部分が同時代の作である。いわば詩人の芸術への評価が、この「ベストセラー」を通じて社会に広められ、結果的に芸術家の名声に寄与した。例えばレーニヤカラヴァッジョに捧げられた詩は、ベッローリやマルヴァジアの伝記に引用されるに至る。

一方で『ガレリア』の作者にとって、この執筆経験は実際の蒐集活動へとむかう契機となった。友人画家カステッロに挿絵版画を依頼し、ルドヴィコ・カラッチをはじめとする多くの画家への注文では作詩のインスピレーション源を求めた。さらに自作の波及効果に自覚的でもあったので、それを画家への書簡内でおわせれば注文交渉を有利に運ぶこともできた。そこに読み取るべきは、利己的な詩人像ではなく、カステッロを複数のパトロンに紹介したことにも感じられる、互惠、あるいは双方向性への志向であろう。なによりも依頼を受けた芸術家にとって有意義なのは、詩人の細かな指示から導かれる新たな視覚イメージである。ここには文学と美術の相互依存が成立している。

同様にパトロンや懇意の有力者との関係においても、マリーノは積極的に着想を求めた。彼らの間で興隆するコレクションニズムを文学におきかえる発想、さらにアルプス以北より導入された邸宅内の展示空間を指す新語 *galleria* への着目なくしては、理想かつ架空のギャラリーたる『ガレリア』は成立し得なかったからである。また網羅的な『ガレリア』とは異なり、後に自邸内で展開された実際の蒐集と展示が、肖像画と素描に特化されていたというのも、当時の流行であった肖像画の贈答行為に則った結果である。

マリーノと芸術の蒐集行為一般との関わりをめぐる以上の論点から、これまでのコレクションニズム研究に一石を投じたいと考える。